

## 目次

はじめに iii

第1章 日本語の述語膠着とモジュール形態論.....影山太郎 1

第2章 レキシコン理論の潮流：  
レキシコンでの操作としての借用について.....長野明子 27

第3章 「(漢語/和語)一字形態素-スル」の語形成と形態構造  
.....岸本秀樹・于一楽 55

第4章 日英語の名詞的繫辞構文の通時的变化と共時的変異  
.....小川芳樹 81

第5章 日本語の存在型アスペクト形式とその意味.....益岡隆志 113

第6章 ブロッキングの認知脳科学：  
語彙と意味と文法との関係に関する予備的考察  
.....小泉政利・安永大地・加藤幸子 135

第7章 コーパスと言語教育：  
コーパスによって深化するL2語彙の教授.....石川慎一郎 153

第8章 語彙獲得：「誤用」から見る普遍性と個別性.....村杉恵子 175

第9章 ラ行五段化の多様性.....佐々木冠 201

執筆者一覧 229

## 第1章

# 日本語の述語膠着と モジュール形態論

影山太郎

### 要旨

従来の語形成研究では扱われなかった日本語述語の活用と屈折の現象を取り上げ、語彙構造と統語構造という2つの異なる領域をつなぐ仕組みを明らかにする。膠着型言語とされる日本語で膠着性が顕著に現れるのは述語の領域である。典型的な屈折型言語では屈折語尾の中に組み込まれる文法的概念（ヴォイス、アスペクト、否定など）が、日本語ではそれ自体が活用する非自立的述語として現れる。複数の述語が数珠つなぎに膠着して長大な述語連鎖を作ることができるのは、隣接する2つの非自立述語ごとに課された活用形を選択制限と、後ろにくる述語が前にくる述語より広いスコープを取るといった意味制約などが複合的に作用するためである。述語膠着性は一般原理に基づく生産的な述語形成だけでなく、言語使用者の創造性（creativity）による特殊な述語形成によっても促進される。

キーワード： 膠着性、語彙情報、活用形、述語形成、形態構造、統語構造

### 1. はじめに

本章では、これまで筆者の語形成研究では扱わなかった日本語述語の活用と屈折の現象を取り上げ、語彙構造と統語構造という2つの異なる領域をつなぐ仕組みを明らかにする。伝統的な考え方では、統語論が文の仕組みを司るのに対して、形態論は語の仕組みを扱うものとされるが、両者の役割分

## 第2章

# レキシコン理論の潮流

## レキシコンでの操作としての借用について

長野明子

### 要旨

レキシコンが記憶の装置であるだけでなく、動的な側面をもつかどうかについては、賛否両論がある。レキシコンの動的な側面として、これまで、派生語や複合語などの複雑語の生成（語形成）や単純形態の語の意味的・統語的情報の変更（語彙的交替）について研究がなされてきた。だが、レキシコンには、第3の動的側面として、借用という、他言語の項目を時に丸ごと、時に部分的に取り込むことができるという特徴がある。借用は、語形成や語彙的交替と同様、語彙を拡大する現象であるにも関わらず、UG基盤の研究でほとんど扱われてこなかった。本章では、言語接触分野における借用に関する研究を参照しながら、前置詞が借用される心的プロセスについて生成文法の枠組みで分析する。既存の語形態への挿入と付加という、2つの取り込みの方法があることを論じる。

キーワード： レキシコンの動的側面、言語接触、借用、L1/L2の混合、挿入と付加

### 1. レキシコン研究の新たな側面

一般に、(メンタル)レキシコンとは、「人間が心の中に持っていると考えられる、語彙的情報が蓄積されている辞書のこと」(中野ほか 2015)とされる。だが、「語彙的情報」とはそもそも何だろうか。Aronoff (1994: 16–22)

## 第3章

# 「(漢語/和語)一字形態素-スル」の 語形成と形態構造

岸本秀樹・于一楽

### 要旨

「愛する」「涙する」「恋する」などのスル動詞は、語彙的なものと統語的なものに大きく分かれる。本章では、レキシコンで形成される語彙的「スル動詞」の形態構造には、動詞化接辞の -s が付加するものと、動詞語幹の -su が付加するもの、独立の動詞「する」が複合するものの3タイプがあり、一字形態素に動詞化接辞が付くものは子音語幹動詞の活用をし、動詞語幹が付加するものと複合が起こるものは、サ変動詞の活用を示す。統語的「スル動詞」については、一字形態素(動詞的名詞)と「する」がもともとは形態的にも統語的にも独立する形で存在するが、一字形態素が「する」に統語的に編入して、一語となることを示す。編入される「する」は元は独立の動詞であるため、このタイプもサ変動詞の活用をする。また、一字形態素と「する」が独立する形式がある統語的「スル動詞」においてのみ「する」と「できる」の置き換えが可能であることを示す。

キーワード： 語形成, 漢語, 和語, スル, 動詞的名詞, 活用, 編入

### 1. はじめに

「二字漢語」, 「和語」, 「外来語」に「する」が組み合わされて作られる「勉強する」「相席する」「テストする」などの「動詞的名詞 (verbal noun (VN)) -スル」構文に関してはこれまで多くの研究が行われてきている (e.g.

## 第4章

# 日英語の名詞的繫辞構文の 通時的変化と共時的変異

小川芳樹

### 要旨

本章では、ある種の名詞句の中に存在する名詞的繫辞 (nominal copula) の「の / of」が、述部倒置の環境で顕在化する構文として、主に、「尺度名詞構文」と名詞句内での wh 移動 / 焦点化を伴う構文を取り上げ、歴史コーパスの調査結果から、以下の2点を示す。(i) 「尺度名詞構文」のうち、尺度名詞と数詞の倒置を伴い、「の / of」を義務的に具現するタイプの出現は日本語でも英語でも、19世紀になって発達してきたものである、(ii) 名詞句内での wh 移動 / 焦点化を伴う英語の構文では、of は生じないのが規範的であるが、1990年代以降のアメリカ英語で、of を伴う変種が頻度を増しつつある。その上で、これらの事実を、「統語的構文化」の仮説と A/A' 移動の特性により説明を試みる。

キーワード： 名詞的繫辞、述部倒置、尺度名詞構文、通時的変化、統語的構文化、A/A' 移動

### 1. はじめに

チョムスキーがコーパス言語学を全否定してきたこともあり (Andor 2004)、生成文法の研究者の中には、データの入手を電子コーパスよりも内省的判断に頼る研究者が今でも多い。しかし、言語間の変異や言語の通時的変化や言語獲得の仕組みを研究するパラメータ統語論の実践のためには、個人の内省

## 第5章

# 日本語の存在型アスペクト形式と その意味

益岡隆志

### 要旨

本章は、日本語の存在型アスペクト形式（テイル形・テアル形）がアスペクトの意味とどのように結びついているかを考察し、テイル形・テアル形がその基本部分において、存在動詞イル・アルに由来する活動性・静態性を一部反映したアスペクト体系を作り上げるといふこと、及び、テイル形・テアル形が表す意味には、イル・アルの意味と前接する動詞の意味から構成的に捉えられる意味とその構成的意味からの派生として捉えられる意味の2類が認められるといふことを指摘する。

キーワード： 存在動詞，コト拡張，動詞タイプ，観察の視座，構成的意味・派生的意味

### 1. はじめに

日本語文法研究の長い歴史のなかで、筆者が専攻する日本語の文研究（文論）が大きな進展を見せはじめたのは1970年代のことである。その進展の原動力になったものの1つが文構成の要となる述語の研究であり、より具体的には、その中核となる動詞の研究であった。また、動詞はその語彙情報が質量ともに豊富であることから、語彙（レキシコン）研究の面からも重要な研究課題となる。日本語研究において文研究と語彙研究が交差する動詞研究の重要性が深く認識され、研究の大きな潮流が形成されるようになったの

## 第 6 章

# ブロッキングの認知脳科学

## 語彙と意味と文法との関係に関する予備的考察

小泉政利・安永大地・加藤幸子

### 要旨

レキシコンと文法との関係についての2つの主要なアプローチを事象関連電位を用いた実験で検証する。Kiparsky (2005) に代表されるフィルターに基づくアプローチはブロッキング現象を意味的逸脱と捉えるが、Embick & Marantz (2008) などで展開されている分散形態論によるアプローチではブロッキング現象を形態統語的逸脱と位置付ける。日本語使役文におけるブロッキング現象に対して、形態統語処理の負荷を反映する P600 と呼ばれる事象関連電位の成分が観察された実験の結果から、分散形態論の分析が支持されることを示す。

キーワード： ブロッキング, フィルター, 分散形態論, ERP (事象関連電位), 実験言語学

### 1. はじめに

実験を用いた言語研究は、便宜上、2種類に分けて考えることができる (Koizumi 2015)。1つは、言語知識 (文法, 語彙) に関する特定の仮説を暫定的に正しいものと仮定して、人間の言語処理機構の性質を探る研究である (例えば, Koizumi et al. 2014, Momma et al. 2016, Yano 2018)。言語の理解や産出の際に脳内でどのような処理がどのようなタイミングで行われるのか、文法や語彙のどのような側面が言語処理にどのように反映されるのか (ある

## 第7章

# コーパスと言語教育

## コーパスによって深化するL2 語彙の教授

石川慎一郎

### 要旨

本章では、英語コーパスの教育応用、とくに、英語語彙指導への応用に関して、(1) 母語話者コーパスに基づく教授内容の精選と精緻化、(2) 母語話者コーパスを用いた自律的言語学習、(3) 学習者コーパスに基づく学習者L2運用の問題点の解明、の3点にわけて概観する。(1)では、コーパスに基づく語彙表・辞書・教材の開発について、(2)では、学習者にコーパスを検索させ、言語ルールをボトムアップ的に発見させるデータ駆動型学習(data-driven learning: DDL)について、(3)では、学習者コーパスを活用した過剰・過少使用言語項目の検出についてそれぞれ論じる。

キーワード： コーパス、語彙選定、辞書編纂、教材開発、DDL、学習者コーパス、言語教育、過剰・過小使用

### 1. はじめに

#### 1.1 英語コーパスの開発史

言語コーパスの歴史を論じる場合、その起源をどこまでさかのぼるかについては諸家により見解がわかれるが、現代につながる本格的なコーパスの嚆矢が1964年に公開されたBrown Corpusであることについてはほぼ共通の理解が得られている(石川2012)。



## 第 8 章

# 語彙獲得

### 「誤用」から見る普遍性と個別性

村杉恵子

#### 要旨

語彙を獲得するとは、語彙のもつ抽象的な統語的形態的特徴を知ることでもある。語彙が担う統語的形態的特徴には、親が直接的に教えたとは考えにくい抽象度の高い性質が含まれる。人はなぜ限られた言語経験をもとに豊かな言語知識を獲得できるのかという問い（「プラトンの問題」）は、語彙獲得においても問題となる。本章では、獲得に時間を要する「形容詞」という統語範疇と、わずか1歳代から観察されるミメティックスを用いた膠着語特有の新造語生成にみられる二つの「幼児の誤用」について記述し、どのような特徴が、いつ、そしてなぜ、言語獲得の過程にみられるのかについて生成文法理論の枠組みで考察する。

キーワード： 第一言語獲得，プラトンの問題，誤用，ミメティックス，形容詞，膠着語

#### 1. はじめに

語彙はどのように習得されるのであろうか。幼児が習得するのは、自身の置かれた環境に頻度高くあらわれる語彙であることは言うまでもない。それは必ずしも両親の母語（方言）とは限らない。両親とは異なる言語（方言）を母語とする養育者に育てられれば、養育者の母語を自身の母語とする場合がある。旅行先の方言もまた然りである。野地（1973-1977）は、実子の縦断

## 第9章

# ラ行五段化の多様性

佐々木冠

### 要旨

日本語方言におけるラ行五段化は母音語幹動詞がさまざまな活用形で /r/ で語幹が終わる子音語幹動詞と類似した語末形式をとる現象である。この現象を語幹の変化とする分析が提案されているが、実際には多様であり、語幹の変化と接尾辞の変化が含まれる。接尾辞の変化で生じるラ行五段化において語幹の形式を決める上で類推が一定の役割を果たす場合がある。

キーワード：ラ行五段化, 脱ラ行五段化, 語幹, 接尾辞, 類推

### 1. はじめに

日本語方言における動詞のラ行五段化は、母音語幹動詞（典型的には一段活用動詞、二段活用動詞と変格活用動詞を含む場合も）がさまざまな活用形で /r/ で語幹が終わる子音語幹動詞（ラ行五段活用動詞）と類似した語末形式をとることを指す。具体的には、方言において「見る」の否定形が *miraN*、使役形が *miraseru*、意志形が *miroo*、命令形が *mire*、過去形が *mitta* のようなかたちをとる現象である。これらの語形は、ラ行五段活用動詞「とる」の否定形 *toraN*、使役形 *toraseru*、意志形 *toroo*、命令形 *tore*、過去形 *totta* と語末形式が類似している。ラ行五段化はこの類似に着目した名称である。

ラ行五段化形式はすべて複数の形態素に分割可能な語形である。上に挙げた例は全て、語幹と一つまたは複数の接尾辞に分割できる。ラ行五段化は語幹の変化なのか接尾辞の変化なのかという問題に関して先行研究ではコンセンサスが得られていない。